

ダイバーシティ担当 菊池理事が行く！ 学部長・機構長インタビュー — 工学部 編 —

各学部の男女共同参画状況や課題、ダイバーシティ推進室への期待や要望について、R4年12月にダイバーシティ推進担当菊池理事とダイバーシティ推進室室員から、工学部 乾学部長へのインタビューを実施しました。



乾 工学部長

30年前のノルウェーと今の日本

菊池： ダイバーシティは、すごく意味が広くて、難しいトピックです。それぞれのご経験や考えなどで捉えられるダイバーシティは人によって全然違うと思うので、そこをざっくばらんにお話しできればと思います。

乾： 修士のころ、ノルウェーに共同研究の関係で3か月行ったんですよ。そこですごくショックを受けたことが、ノルウェーの工科大学には女子がすごく多かったことです。その理由は簡単で、「仕事にしたときに儲かるから」って話だったんです。彼女たちが**大学で勉強するのは、その先に仕事があって、就職に有利だから理工系の勉強をする、というすごくシンプルな理由**だったんですね。その時に、日本も理工系の女性が増えてくると思ったんだけど、30年経ってもあんまり増えないですよ。工学部に入学する女子学生に入学理由を聞いてみると、小さい頃の理科教室での楽しさとか動機づけがあがってくるんです。僕らは女子学生を増やそうと思って、高校生に話をするんだけど、**多分高校では遅くて、小学校中学校での体験や家庭背景が大事で、そこから考え方を変えていかないと増えない。**

理工系女子が少ない理由として、小中学校の段階で、すでに何かが違っているのかなと思うことがあります。

菊池： 工学系や理学系は、他分野から見るととても難しい感じですが、内容を知るほど、「私たちが生きている実社会」と密接に繋がっていますし、分かり易い表現さえすれば、コミュニケーションしやすい内容が多いのに気づかされます。その一方で、職業として捉えると、工学 = 男性的だと、まだまだ日本社会ではなってしまうのはもったいないと思います。乾先生のおっしゃるように、幼い頃の家や社会での出会いや経験が結びついてくる結果なのだと思います。少し変えればよいことではなく、全体を変えていく為に、簡単にはいかないことは沢山ありますが、大学はそれぞれの専門分野の魅力を発信していく必要があると思います。

乾： 高校に入ってすぐに理系・文系に分かれることで、大きなチャンスを失っている人がいると思うんですよ。僕としては理系を選択する人が増えて欲しいんだけど、日本の小中高での理数系の教育は、そこが成功してないんじゃないかなという気がしますね。

学ぶことの多様性

乾 : もっと「学問を超えて話ができる」ということがあったほうが良いと思うんですね。人文社会科学部に「人文社会科学部の学生も数学やIT系をいっしょに勉強しませんか」と言ったんです。「その代わりに、工学部の学生に対して経済と経営を教えてほしい」と。それくらい**ごちゃまぜにしていくと、学問的なダイバーシティになると思う**んです。それって結構いいと思う。

菊池 : いいと思います。社会に出て、工学を使って「もの」を作っても、その「もの」をどう社会に届けていくかとなったときには、やはり最後は、人が人に伝えていく必要があります。そこには経済学や心理学といった部分も重要で、**自分の専門がありつつ、それを外に出すためのツールとして他の分野も関わってくるということが理解できれば、その後**

の人生がすごく変わってくるかなと思います。

例えば、大学では、原子力について学ぶこともありますが、そこでは、様々な議論だって生まれています。私たちの日常に繋がる技術のプラスの面もマイナスの面も学んで、良いとか、悪いとかだけでなく、その間にあるグレーゾーンを捉え議論しながら、方向性を探っていくことは大切で、大学だからこそ出来ることだと思うんです。

乾 : ダイバーシティが大事ですよ。**ジェンダーだけじゃなく、学問とか思想とか含めて共有できる**、大学はそういう場であると思うし、多様性ってそういうところですよ。原発にしても、反対か賛成かの二択じゃなくて議論ができる場が欲しいと思いますね。

育休への認識の変化

乾 : 良いことがありまして、2件、男性教員から育休の申し出がありました。生きていく命のスタート時に、向き合っていくというのは凄くいいなと、育児の経験は絶対にしてほしいなと思いましたね。**育休を取得する男性教員が増えているということは男性側も変わってきてるな、と感じました。**

菊池 : 幼い頃の記憶の中に、どこまで留められるか分かりませんが、赤ちゃんの時に得た温かい経験は、その後生きていくと思うんです。

お父さん、お母さん、地域の人、いろんな人の笑顔が無意識に刻まれていくことで、その子が大人になったとき、社会で色々な人に会う事も自然にできてくるのではと思います。お父さんが育休できる制度を整えていくことはとても大切だなと思います。

乾 : **家庭と研究の両立ができる気がましすし、できる未来が見えてきた**と思いますね。



育児休暇について

育児休業・出生時育児休業の制度については下記のリンクから確認できます。

- ① [妊娠・出産の申出と育児休業・出生時育児休業制度等の個別の周知・意向確認について](#)
 - ② [両立支援（ダイバーシティ推進室HP）](#)
- 出産・育児・介護等のライフイベントに対して、各種支援制度も整備しています。
- ① [ライフイベント研究支援員制度](#)
 - ② [研究復帰支援制度](#)



ダイバーシティ推進室への要望

菊池： ダイバーシティ推進室への要望・期待などはありますか？

乾： リケジョのイベントとかに関わりたいとは思っています。女子学生へどうアプローチしていくかという部分も含めて、試行錯誤の状態なんです。女子学生が増えて2割ぐらいになってくるとがらりと変わって来ると思います。少し状況は改善していますが、まだこれからといった感じです。

菊池： 一概には言えないですが、子どもに接すると、女の子って母親や周りをよくよく観察するなと感じます。その中で、自分が目指したいモデルができたり、「自分がどうなりたいか」をイメージして成長していく子も多いのではと思います。成長過程で出会う人が憧れになって、そこから自分の将来を設計したという人もいるかもしれません。そこで、例えば、大学が、地域企業と連携して、小中学生の子供たちと一緒に企業を訪ねて、工場を見学したり、工場で働く大人から、その仕事につい

て聞けたりそんなイベントがあったらよいなと。私たち大人にとっては、一つのイベントかもしれませんが、興味や夢を持つきっかけになる可能性はあると思います。「私は、将来、科学者になるんだ！」とか、十分にありえるのではないのでしょうか。

乾： 理工系女子の人数は増えているんですよ。ただ、増えているのは、理工系のうち、医療系や食品系ですね。仕事のイメージがメディアを通してできてきていることもあります。逆に言うと、**女性のエンジニアもいるのになかなか目に入らない。だから、周り**にいるんだということを示すことは大事でしょうね。

菊池： 大学には、生き生きと研究されている女性の先生方もいらっしゃいますので、そこから「楽しさ」を伝え発信していくのもいいかもしれませんね。



ワーク・ライフ・バランス

菊池： 乾先生のワーク・ライフ・バランスはいかがですか？

乾： 食事が大切だと思っていて、**夕食は、結婚以来、必ず家族と一緒に食べています。**この職場のいいところで、教員は時間に結構自由がきくじゃないですか。朝、早めに来て仕事を始めて、18時前に来る仕事は断っているんです。これは学部長になってからも続けています。

菊池： 素晴らしいです。**そこはマネジメントですよ。そういうリズムで、仕事と家庭のバランスを取られてるんですね。**